

子母澤寛の『厚田日記』

大河ドラマになった「勝海舟」、勝太郎をはじめ何人もの役者が演じた「座頭市」などの原作を書いたことで知られる子母澤寛は、石狩市厚田区の出身です。新聞記者などを経て、時代小説の大家となり、数多くのベストセラーを書きました。

子母澤寛が、晩年に残した秀作に『厚田日記』があります。幕府御家人で江戸や箱館で政府軍と戦ったといわれる、育ての親でもある祖父から聞かされたであろう話をもとに、

作家として長年培った経験で、短編ながら読み応えのある小説に仕上げています。

物語は箱館戦争の敗残兵7名が厚田に落ち延びてきた所から始まり、脱落者や死者も出て残った4人が、地元のアイヌの中に溶け込み暮らします。そこに、開拓判官松本十郎が登場します。この判官と主人公斎藤鉄太郎は、若いころ江戸の剣術道場の同門で仲が良かったという設定です。松本十郎は庄内藩時代、蝦夷

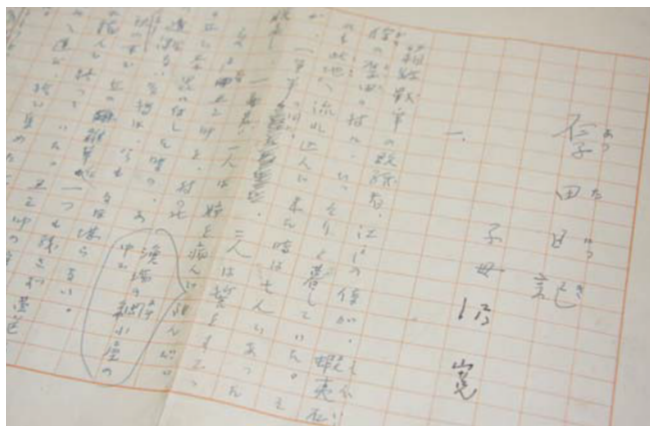
地に派遣され、浜益のハマシケ陣屋に赴任していますが、その後江戸でも活躍した幕末の志士の一人です。戊辰戦争では幕府側に立つて戦いましたが、敵将だった黒田清隆に見込まれ、維新後北海道開拓の責を任されます。斎藤鉄太郎のモデルである子母澤寛の祖父・梅谷十次郎は、本当に松本と懇意だったのかは分かりませんが、劇的な松本とは対照的に厚田で暮らす斎藤が描かれます。中学に入り厚田を出た子母澤寛

は、その後厚田に帰ることはありませんでしたが、厚田に残った義妹や厚田の人たちとの交流はありました。晩年まで厚田を思う心が強かったことは、随筆や書簡などを読むと分かります。

その『厚田日記』の自筆原稿ですが、書かれた後作者から誰かの手に渡ったのでしょうか。2012年の夏、古書入札に掛かり、



自筆原稿は12/10(月)にオープンした「あいかげとよかん」でも展示されました。



『厚田日記』の自筆原稿

札幌の古書店が落札しました。その原稿を「札幌はまなすロータリークラブ」が買い上げ、石狩市民図書館に寄贈していただきました。市民図書館で公開後、子母澤寛の母校である厚田小学校図書館でも公開しましたが、今後は原稿の劣化を防ぐため、複製の展示を予定しています。故郷を出て数十年後、祖父や故郷を思いながら書いた小説の自筆原稿が、生まれ育った厚田の地で地元の人たちの目に触れている光景を、



子母澤 寛 Shimozawa Kan

1892年2月1日－1968年7月19日、小説家。石狩市厚田区出身。明治大学法学部卒。『新選組始末記』をはじめ維新に関わる作品多数。また、大衆的な時代小説も数多く、映画・テレビ化されている。